

妊娠期の夫婦関係と父親の育児行動への期待及び 親アイデンティティとの関連

The relationships among marital relations, estimated father's childrearing
behavior and parents' identity during pregnancy

石田 有理¹⁾

ISHIDA Yuri

山下 倫実¹⁾

YAMASHITA Tomomi

加藤 陽子¹⁾

KATO Akiko

布施 晴美¹⁾

FUSE Harumi

要 旨

本研究の目的は、夫婦から家族へと関係が移行しはじめる妊娠期の夫婦を対象に、出産前後の夫婦の関係性評価や関係効力性、夫の産後予測される育児行動が親アイデンティティ（以下親ID）にどのような影響を及ぼすか探索的に検討することであった。令和2年3月に、現在第1子妊娠中の過程を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施した。分析対象は回答漏れがなかった夫婦197組であった。

父母の親IDの構造を検討したところ、母親では、「親役割遂行への不安」「親役割遂行への自信」「親になることへの展望」の3因子、父親では、「親になることへの不安」「親になることに対する自信」「親になることへの自信のなさ」の3因子でそれぞれ構成されていた。次に、妊娠期別に親IDに違いがみられるかについて検討した結果、父親では大きな差異はみられなかった。母親では、他の期間よりも正産期（妊娠37週以降）において、「親役割遂行への不安」が高いことが示された。最後に、妊娠期の夫婦の関係性と、出産後予測される父親の育児行動評価が、親IDに及ぼす影響について検討した。その結果、母親の「親役割遂行への自信」、「親になることへの展望」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると自分自身が思う程度が高い場合に高まるが、父親の母親に対する支援を高く予測する場合に「親役割遂行への自信」が高くなり、子どもに対する育児行動を高く予測する場合に「親になることへの展望」が高くなることが示された。他方、父親の「親になることに対する自信」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると自分自身が思う程度が高く、自分の母親に対する支援と子どもに対する育児行動を高く評価していると高くなるが、妻が父親の子どもに対する育児行動を高く予測していると低くなることが示された。妊娠期においては、親IDは父親と母親の間で異なり、子育て期とも異なることが示唆された。

¹⁾ 十文字学園女子大学教育人文学部 心理学科

Department of Psychology, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

キーワード：妊娠期、親アイデンティティ、夫婦関係、父親の育児行動

【問 題】

これまで、夫婦関係の良否が、親の育児ストレスや養育態度と関連があることが様々な研究で示されてきた。たとえば、佐藤（2012）では、夫婦関係の評価得点の高群と低群を比較し、高群の母親は、母親役割受容の積極的・肯定的受容得点が高いこと、また、夫のソーシャルサポートについても評価が高いことが示されている。また、堀口（2006）では、夫婦関係と親としての養育態度との関連を検討しており、夫婦関係満足度が養育態度に有意な影響を及ぼしていることが示されている。一方で、夫婦間に葛藤や不満があると、子どもに対して受容的な養育態度を取りにくく、非受容的な養育態度になる影響がみられた。これらのことから、夫婦関係は親が行う子育ての基盤になるものであると考えられる。しかし、妊娠・出産を機に夫婦関係は大きく変容することが予想される。

妊娠・出産により、それまでの二者関係であった夫婦関係から、子どもを含めた三者関係である家族関係へと移行するため、この移行期に適応できるかどうか、その後の夫婦関係に影響をあたえる（Belsky & Kelly, 1994）。前述した堀口（2006）の研究でも、子どもが誕生した時点での夫婦関係が5年後の夫婦関係に影響を及ぼすことが示されている。したがって、夫婦関係は子育ての基盤であると同時に、パートナーとしての関係でもあり子どももふくめた家族関係において、夫婦関係が良好であるかどうかは重要である。また、出産後に、親として子育てを行う以前に、妊娠期において、子どもの存在が意識されはじめ、家族関係への移行がはじまっていると考えられる。そのため、妊娠期における夫婦関係のあり方や変化についても検討する必要があるだろう。

同時に、親となることで、青年期に獲得した「個人としてのアイデンティティ」に加えて、「親アイデンティティ」が発達するといえる。母親においては、「個としてのアイデンティティ」と「親アイデンティティ」を両立していることが、家庭生活に満足しており、夫からの理解や受容をより認知し、家族にも積極的に関与する特徴につながるが示されている（岡本, 1996）。つまり、「個人としてのアイデンティティ」に加え、家族関係に関わる「親としてのアイデンティティ」を無理なく獲得することが、個人の発達過程においても重要であり、夫婦関係を良好に保ち子育てに積極的に関わるためにも必要であると考えられる。

これまで、3歳未満の子どもが1名のみ夫婦を対象に、親アイデンティティについて検討した研究（加藤・山下・石田・布施, 2019）では、夫婦間においては、類似した親アイデンティティが獲得される傾向が示唆された。また、初期の子育てにおいては、親アイデンティティの獲得には、父親が子どもの世話をを行う直接的な育児行動よりも、母親に対して支援する間接的な育児行動が重要であることが示された。このことから、親としてのアイデンティティの獲得には、子どもを介した夫婦関係が大きく関連していることが考えられる。また、父親と母親の親役割意識の芽生えのプロセスには違いがある可能性があるだろう。妊娠期には妻のみに身体的変化があること、子育て初期には授乳など必要とされる育児の特性から母親中心の育児になるため、母親の親アイデンティティは子の誕生によって直接的な影響を受けるといえる。しかし、父親にとって妊娠期や子育て初期は、子を育てる母親の支援を行う時期であり、子どもを育む母親のサポートを通して、親アイデンティティの獲得が促される側面が大きいと考えられる。一方、母親もこのような父親のサポートを受けて、子と自分との関係性に加え、親となった夫と自分との関係性の中で親アイデンティティを育んでいく可能性がある。先行研究においても、妊娠期から、女性には母親役割意識や役割行動があらわれることが示されている（たとえば、小泉ら, 2004, 佐々木, 2006）。また、周産期における父親役割について検討した質的研究（木越・泊, 2006）

においては、夫の感情・行動の根底には妊娠している妻に対する気遣いが存在していると考察している。夫は妊娠中から、育児が長期的に続くものであるという心構えを持っていることが示されており、このことから、妊娠したからと急に意識するのではなく、夫はそれ以前から妻に対して気遣いをしていたと考えられる。また、自分が妊娠による身体的変化を体感しないという限界から、父母の違いを認識し、妻をサポートすることや、妻をねぎらうことにつながることも示唆された。

一方で、妊娠期における母親意識と父親意識の違いも指摘されている。小野寺・青木・小山（1998）では、妊娠期において、母親にくらべ父親において親になるという実感が低いことが示されている。また、男性は親意識として「子どもと一緒にいるのが楽しくなるだろう」などの肯定的な意識のみが高まるのに対して、女性は肯定的な意識のみではなく、「子どもに対していらいらすることが多くなるだろう」などの否定的な意識も高まることが示されている（小泉ら，2004）。これらのことから、妊娠期から、親アイデンティティが発達しはじめること、父親と母親ではそのプロセスが異なる可能性が考えられる。

以上のことから、親アイデンティティの獲得と夫婦関係との関連を検討するためには、妊娠期における検討が不可欠といえる。妊娠期は、二者関係である夫婦関係から三者関係である家族関係への移行がはじまる期間だと考えられる。妊娠期の夫婦関係に対する満足感が高いことや、困難な問題に対して「私たちなら対処できる」という効力感である関係効力性（relational efficacy）の程度（浅野，2011）が高いことは、親になる不安を低下させ、親になることに対する肯定的な意識を高めると予測する。なぜなら、このような夫婦関係の良好さやパートナーと困難を乗り越えることができるという意識はパートナーに対する信頼感につながり、一緒に子育てをするイメージが明確になったり、育児において困難なことがあっても乗り越えられるという自信につながるためである。また、この時期には子どもが生まれた後の家族の変化について、ポジティブに捉える側面とネガティブに捉える側面が考えられる。子どもが生まれた後、妻-夫という二者関係を超えた新しい夫婦の絆が生じると予測するほど、子どもに対しても、パートナーに対しても肯定的な感情を抱き、親となった自分について円滑に受容できる可能性がある。さらに、先述したように妊娠期や子育て初期において夫の育児支援は不可欠なものであり、夫自身が出産後に積極的に育児に参加するイメージを持っていることや、妻側が夫の積極的な育児参加を期待していることもまた、親になった自分について肯定的な感情を抱かせる要因であると考えられる。ただし、これらの要因がどのような順序性をもって生じているのか、因果関係については推測することが困難であるため、本研究では、夫婦から家族へと関係が移行しはじめる妊娠期の夫婦を対象に、妊娠中の時期別（初中期，後期，正産期）の親アイデンティティの様相を明らかにし、出産前後の夫婦の関係性評価や関係効力性、夫の産後予測される育児行動が親アイデンティティにどのような影響を及ぼすか探索的に検討する。

【方 法】

調査協力者

令和2年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在第1子妊娠中の家庭を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施した。分析対象は回答漏れがなかった夫婦197組（夫197名，妻197名）であり、平均年齢は母親が31.6歳（ $SD = 4.39$ ），父親が33.9歳（ $SD = 6.37$ ）であった。なお、本調査の実施については、本学の倫理審査委員会の承認を受けている（番号：2019-022）。

質問項目

質問を開始する前に、調査協力者のプライベートな情報について尋ねる項目が多数存在するため、①回答はすべて統計的に処理され、個人が特定されること、情報が漏洩することはないこと、②個々の質問への回答は任意であることを教示した。また、WEB調査の最初のページに調査協力者が最後まで回答することをもって、本研究への参加の「同意」とすることについて明記した。

また、統計解析については、IBM社のSPSS26を用いて、因子分析、分散分析、重回帰分析を行った。詳細は結果で述べる。

1) 夫婦関係満足度

諸井（1996）の「夫婦関係満足度尺度」を用いて、父母双方による夫婦関係の満足度を評価した。尺度には、「夫」という文言が入っていたが、夫婦に回答を求めため「配偶者」に統一して尋ねた。計6項目について、「1. ほとんどあてはまらない」から「4. かなりあてはまる」までの4件法で回答を求めた（母親： $\alpha = .925$, 父親： $\alpha = .951$ ）。

2) 夫婦の関係効力性

浅野（2009）の「関係効力感尺度」を用いて、父母両方による夫婦の関係効力性を評価した。計10項目について「1. まったく思わない」から「5. 非常に思う」までの5件法で回答を求めた（母親： $\alpha = .947$, 父親： $\alpha = .943$ ）。

3) 産後予測される夫の育児行動に対する評価

西尾（2013）の父親育児行動リストを基に、産後予測される夫の育児行動に対する予測を尋ねた。母親に対しては、「配偶者の方はお子様が誕生した後、以下の項目をどの程度行うことができそうですか」と尋ね（妻による他者評価）、父親に対しては「あなたはお子様が誕生した後、以下の項目をどの程度行うことができそうですか」と尋ねた（夫による自己評価）。項目については、「母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う」、「子供ができて、夫婦だけの時間を確保する」、「夫の両親との関係を上手に調整する」、「こどもができて、セックスレスにならない」の4項目を追加し、計15項目について「1. 全くできそうにない」から「5. 確実にできそう」までの5件法で回答を求めた。

4) 親アイデンティティ

夫婦それぞれの「親としてのアイデンティティ」を評価するために、山口（2010）の親アイデンティティ尺度及び母親アイデンティティ尺度を参考に、18項目を選定して用いた。本研究においては、妊娠期の夫婦を対象とした調査のため、子どもの誕生後の見通しについて回答を求めた。「お子さんの誕生後、あなたはどのように感じたり、考えたりすると思いますか」というかたちで尋ね、「1. そう思わないだろう」から「5. そう思うだろう」までの5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。なお、結果内では親アイデンティティを親IDと記す。

5) 出産後の夫婦の絆

子どもの誕生によって、夫婦の絆が強くなると思う程度について評価するために、独自に作成した。「子どもは夫婦の絆を深めてくれると思う」、「子育てを夫婦で協力し合うことによって、家族としての

つながりが生まれると思う」、「子どもの成長と共に、夫婦としての成長も実感できると思う」、「子育てをするパートナーが、現在の配偶者でよかったと思う」、「夫婦関係が子どもの誕生によって脅かされるように感じる」の計5項目について尋ねた。「1. 全くそう思わない」から「5. 非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。「夫婦関係が子どもの誕生によって脅かされるように感じる」については、信頼性を低下させるため、今回の分析からは除外し、4項目とした(母親： $\alpha = .910$ ，父親： $\alpha = .928$)。

なお、上記の項目のほかに、家庭環境に関する項目として、①年齢、②配偶者の年齢、③職業、④配偶者の職業、⑤妊娠週数、⑥結婚期間、⑦収入についても尋ねた。

【結果】

1. 調査協力者の属性

まず、職業については、男性は会社員が64.0%と最も多く、次いで公務員・教職員が14.2%、専門職(弁護士、税理士等、医療関連)が3.6%であった。女性は専業主婦が43.2%であった。有職者の割合については、会社員が26.9%、パート/アルバイトが11.2%であった。国立社会保障・人口問題研究所(2015)の出生動向基本調査によると、第1子妊娠判明時就業率は72.2%、出産前後の就業継続者の割合は、全体の38.8%(出産前就業者の53.1%)であった。本調査の対象者の妊娠期間には幅があるため、妊娠判明時就業率と出産前後の就業率をあわせて考えると、平均的な就業率だと考えられる。次に、世帯収入は400万~600万円未満が38.6%と最も多く、次いで600万~800万円未満が20.8%、200万~400万円未満が17.8%、800万~1000万円未満が10.7%であった。厚生労働省(2019)の国民生活基礎調査によれば、30代の1世帯あたりの平均所得額は614万8千円となっており、平均的な世帯収入の調査協力者であるといえる。最後に、結婚期間は平均28.8ヶ月($SD = 24.66$)、回答時期における妊娠期間は平均28.7週($SD = 7.93$)であった。

2. 産後予測される父親の育児行動評価の因子分析

まず、母親が評価した産後予測される父親の育児行動15項目について、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。固有値1.0以上の基準で2因子を抽出した。なお、因子負荷量が低かった1項目「子どもの保育園、幼稚園などの送迎をする」は除外した。

第1因子は「子どものオムツ・トイレの世話をする」、「子どもをお風呂に入れる」、「子どもと一緒に遊ぶ」など6項目から構成されていた。これは直接的に子供に働きかける育児行動であり、「対子ども育児」因子である(母親： $\alpha = .912$ ，父親： $\alpha = .904$)。第2因子は「母親に対して労いの言葉をかける」、「母親の話し相手になる」、「炊事、洗濯、掃除などの家事をする」など8項目から構成されていた。これは育児する母親を支援することで間接的に育児にかかわる行動であり、「対母親支援」因子である(母親： $\alpha = .915$ ，父親： $\alpha = .909$)。

3. 親IDの因子分析

夫婦それぞれの「親としてのアイデンティティ」の構造について検討するために、因子分析を行った。

(1) 母親の親ID

母親の回答した親ID18項目について、因子分析(最尤法・プロマックス回転)を実施した。1.0以上

の基準で3因子を抽出した (Table 1)。なお、因子負荷量が低かった1項目「子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要である」は除外した。

第1因子は「親としてどうあるべきかまったくわからない」「この先子育てをどう進めて良いのか検討もつかない」などの8項目から構成されていた。自分が親として役割を果たしていくことが困難なのではないかという不安を示す因子であり、「親役割遂行への不安」因子とした ($\alpha = .918$)。第2因子は「親としてやっていける自信がある」「子どもにとって良い親である」などの7項目から構成されていた。自分が親として役割を十分果たせるという自信を示す因子であり、「親役割遂行への自信」因子とした ($\alpha = .853$)。第3因子は「親になってよかった」「親としての生き方は様々なので自分に合ったものを積極的に選んでいきたい」の2項目から構成されていた。人生の中で親としての自分がどう位置づけられるかについて包括的な展望を示す因子であり、「親になることへの展望」因子とした ($\alpha = .614$)。

Table 1 母親の親IDの因子分析結果

	因子		
	I	II	III
I. 親役割遂行への不安 ($\alpha = .918$)			
8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.951	-.100	.211
3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.913	-.120	.196
7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.781	-.094	.085
9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかさっぱりわからない	.741	.046	-.023
16. 自分は親として不適格であるような気がする	.721	.077	-.296
17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	.716	.155	-.250
13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない	.607	-.096	.061
2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.564	.185	-.334
II. 親役割遂行への自信 ($\alpha = .853$)			
10. 親としてやっていける自信がある	-.138	.826	.054
4. 子どもにとって良い親である	-.048	.766	.127
1. 親として順調にやっていける	-.150	.746	.132
18. 親として一人前である	.084	.697	-.130
14. 子育てを楽しんでいる	-.069	.616	.163
15. 親として関わっている時が、一番自分らしい	.268	.558	.154
6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	.051	.535	.294
III. 親になることへの展望 ($\alpha = .641$)			
12. 親になって良かった	-.043	.371	.564
11. 親としての生き方は様々なので、自分に合ったものを積極的に選んでいきたい	.146	.374	.505
因子間相関			
	I	.122	-.462
	II		-.140

(2) 父親の親ID

父親の回答した親ID18項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。1.0以上の基準で3因子を抽出した（Table 2）。

第1因子は「この先子育てをどう進めて良いのか検討もつかない」「親である私は本当の私ではないような気がする」などの7項目から構成されていた。自分が親になることや、親として役割を果たせるかについての不安を示す因子であり、「親になることへの不安」因子とした（ $\alpha = .877$ ）。第2因子は「親としてやっていける自信がある」「子どもにとって良い親である」などの9項目から構成されていた。親になることに対する自信やポジティブな意識を示す因子であり、「親になることに対する自信」因子とした（ $\alpha = .864$ ）。第3因子は「自分は親として不適格であるような気がする」「親として自分に何か意味のあることができるとは思えない」の2項目から構成されている。自分が親としてふさわしいか自信がもてないことを示す因子であり、「親になることへの自信のなさ」因子とした（ $\alpha = .916$ ）。

Table 2 父親の親IDの因子分析結果

	因子		
	I	II	III
I. 親になることへの不安 ($\alpha = .877$)			
3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.888	-.072	-.142
2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.805	.038	-.067
8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.797	-.050	-.005
9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかさっぱりわからない	.688	.012	.184
5. 子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だ	.589	.145	.034
7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.579	-.048	.282
13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない	.404	.038	.105
II. 親になることに対する自信 ($\alpha = .864$)			
10. 親としてやっていける自信がある	-.093	.800	-.002
4. 子どもにとって良い親である	.140	.762	-.089
1. 親として順調にやっていける	-.164	.708	-.012
12. 親になって良かった	-.121	.663	-.128
6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	.086	.604	-.093
18. 親として一人前である	.032	.595	.248
15. 親として関わっている時が、一番自分らしい	.187	.552	.245
11. 親としての生き方は様々なので、自分に合ったものを積極的に選んでいきたい	.097	.552	-.285
14. 子育てを楽しんでいる	.012	.543	.161
III. 親になることへの自信のなさ ($\alpha = .916$)			
16. 自分は親として不適格であるような気がする	.302	-.117	.757
17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	.365	-.037	.639
因子間相関			
	I	.141	.578
	II		.212

4. 妊娠中の時期別の親IDの比較

本研究で調査した親IDは出産後に関する見通しであり、妊娠の進行によって母体に変化していくことを考えると、妊娠時期によって親IDが変化する可能性を考慮する必要があるだろう。そこで、妊娠中の時期別に親IDに違いが見られるかについて分析を行った。分析に先立ち、妊娠中の時期を「初中期（～27週）」、「後期（28～36週）」、「正産期（37週～）」の3群に分けた。そのうえで、妊娠期の3群を独立変数、親IDの各因子得点を従属変数とする一要因の分散分析を行った（Table 3, Table 4）。

まず、母親についての分析結果から、「親役割遂行への不安」においてのみ、時期の効果が有意であった（ $F(2,194) = 3.867, p < .05$ ）。そこで、TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、妊娠期初中期・後期に比べて、正産期の妻の方が有意に「親役割遂行への不安」得点が高かった（ともに $p < .05$ ）。

次に、父親についての分析結果から、「親になることへの不安」と「親になることへの自信のなさ」において、時期の効果が有意傾向であった（ $F(2,194) = 2.529, p < .10$ ； $F(2,194) = 2.406, p < .10$ ）。そこで、TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、「親になることへの不安」のみ群間に有意傾向の差がみられ、正産期の妻を持つ夫は妊娠後期の妻を持つ夫よりも「親になることへの不安」得点が高い傾向にあった（ $p < .10$ ）

Table 3 時期別にみた母親の親IDの各下位尺度因子得点

妊娠時期	初中期 <i>n</i> = 83	後期 <i>n</i> = 71	正産期 <i>n</i> = 43
親役割遂行への不安	2.78 (0.90)	2.81 (0.83)	3.21 (0.85)
親役割遂行への自信	3.39 (0.66)	3.30 (0.59)	3.28 (0.69)
親になることへの展望	4.16 (0.66)	4.11 (0.67)	3.98 (0.64)

カッコ内は標準偏差

Table 4 時期別にみた父親の親IDの各下位尺度因子得点

妊娠時期	初中期 <i>n</i> = 83	後期 <i>n</i> = 71	正産期 <i>n</i> = 43
親になることへの不安	2.73 (0.89)	2.66 (0.68)	3.00 (0.81)
親になることに対する自信	3.55 (0.62)	3.52 (0.53)	3.58 (0.56)
親になることへの自信のなさ	2.54 (1.09)	2.50 (0.87)	2.90 (0.97)

カッコ内は標準偏差

5. 妊娠期の夫婦関係及び産後予測される父親の育児行動評価が親IDに及ぼす影響

使用する各変数について平均得点を算出し、それらの記述統計をTable 5に示す。また、相関分析の結果についてはTable 6に示す。

まず、夫婦の関係性を示す変数である「夫婦関係満足度」、「関係効力感」、「出産後の絆」は、夫婦間で中程度の有意な正の相関がみられることが示された。親IDに関しては、妻の「親役割遂行への不安」と、夫の「親になることへの不安」とに、妻の「親役割遂行への自信」と、夫の「親になることに対する自信」とに、それぞれ中程度の有意な正の相関があった。また、夫が予測する自身の育児行動評価と、父親IDの「親になることへの自信」、妻が予測する夫の育児行動評価と、母親IDの「親になるこ

Table 5 母親と父親の親IDと夫婦関係満足度、関係効力感、育児行動、出産後の絆の平均値 (SD)

妻： 夫婦関係 満足度	妻： 関係 効力感	妻： 出産後の 絆	母親ID			父親の育児行動への評価	
			親役割遂行 への不安	親役割遂行 への自信	親になること への展望	対子ども育児 (他者評価)	対母親支援 (他者評価)
3.47	3.83	3.83	2.88	3.33	4.10	4.11	3.84
(0.53)	(0.74)	(0.74)	(0.88)	(0.64)	(0.66)	(0.76)	(0.79)
夫： 夫婦関係 満足度	夫： 関係 効力感	夫： 出産後の 絆	父親ID			父親自身の育児行動への評価	
			親になること への不安	親になることに 対する自信	親になること への自信のなさ	対子ども育児 (自己評価)	対母親支援 (自己評価)
3.42	3.90	4.30	2.77	3.55	2.60	4.05	3.97
(0.63)	(0.68)	(0.66)	(0.81)	(0.57)	(1.00)	(0.66)	(0.69)

Table 6 夫婦関係満足度、関係効力感、出産後の絆、親ID、育児行動の相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
①妻：夫婦関係満足度															
②妻：関係効力感															
③妻：出産後の絆															
母親ID	④親役割遂行への不安														
	⑤親役割遂行への自信														
	⑥親になることへの展望														
父親の育児行動の評価	⑦対子ども育児														
	⑧対母親支援														
	⑨夫：夫婦関係満足度														
父親ID	⑩夫：関係効力感														
	⑪夫：出産後の絆														
	⑫親になることへの不安														
父親自身の育児行動	⑬親になることに対する自信														
	⑭親になることへの自信のなさ														
	⑮対子ども育児														
	⑯対母親支援														

† p < .10, * p < .05, ** p < .01

とへの展望」とに、それぞれ中程度の有意な正の相関がみられた。

次に、夫婦関係および父親の育児行動への評価が親IDに及ぼす影響を検討するために、母親、父親別に目的変数を親ID、説明変数を夫婦の関係性（夫婦関係満足度、関係効力感、出産後の絆）、産後予測される夫の育児行動に対する評価（対子ども育児/対母親支援）としたステップワイズ法による重回帰分析を行った（Table 7, Table 8）。

Table 7 夫婦関係および父親の育児行動への評価が親IDに及ぼす影響（母親）

説明変数	目的変数		
	親役割遂行への不安	親役割遂行への不安	親になることへの展望
結婚期間			
妊娠期			
夫婦関係満足度（夫）			
夫婦関係満足度（妻）			
関係効力感（夫）			
関係効力感（妻）			
出産後の絆（夫）	-.230**		
出産後の絆（妻）		.178*	.489**
対子育児（夫）			
対母親支援（夫）			
対子育児（妻）			.205**
対母親支援（妻）		.277**	
R ²	.053	.151	.379
(Adjusted)	.048	.142	.372
F	10.896**	17.253**	59.161**

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 8 夫婦関係および父親の育児行動への評価が親IDに及ぼす影響（父親）

説明変数	目的変数		
	親になることへの不安	親になることに対する自信	親になることへの自信のなさ
結婚期間			
妊娠期			
夫婦関係満足度（夫）			
夫婦関係満足度（妻）			
関係効力感（夫）			
関係効力感（妻）			
出産後の絆（夫）		.209**	
出産後の絆（妻）	-.347**		-.260**
対子育児（夫）		.271**	
対母親支援（夫）	.258**	.345**	
対子育児（妻）		-.145*	
対母親支援（妻）			
R ²	.109	.392	.068
(Adjusted)	.100	.379	.063
F	11.829**	30.918**	14.117**

** $p < .01$

その結果、母親IDの「親役割遂行への不安」に対して、父親の出産後の絆が負の影響を及ぼすことが示された。また、母親IDの「親役割遂行への自信」に対して、母親の出産後の絆、母親の対母親支援が正の影響を及ぼすことが示された。母親IDの「親になることへの展望」に対しては、母親の出産後の絆、母親の対子育児が正の影響を及ぼしていた。

父親に関する結果としては、父親IDの「親になることへの不安」に対して、母親の出産後の絆が負の影響を、父親の対母親支援が正の影響を及ぼすことが示された。また、父親ID「親になることに対する自信」に対して、父親の出産後の絆、父親の育児行動評価（対母親支援/対子ども育児）が正の影響を、母親の対子育児が負の影響を及ぼすことが示された。父親IDの「親になることへの自信のなさ」に対しては、母親の出産後の絆が負の影響を及ぼすことが示された。

【考 察】

本研究の目的は夫婦から家族へと関係が移行しはじめる妊娠期の夫婦を対象に、妊娠中の時期別（初中期、後期、正産期）の親アイデンティティの様相を明らかにし、出産前後の夫婦の関係性評価や関係効力性、夫の産後予測される育児行動が親アイデンティティにどのような影響を及ぼすか探索的に検討することであった。

まず、分析に先立ち、産後予測される父親の育児行動について因子分析を行った。3歳以下の子どもの子育てをしている夫婦を対象に行った、加藤・山下・石田・布施（2019）とはほぼ同じ結果であったが、一部異なる部分があった。保育園等への送迎が項目として含まれず、家事を行うことが「対子育児」ではなく「対母支援」に含まれていた。保育園の送迎は、出産後すぐに生じることではないので、イメージがわからなかったのではないかと考えられる。また、妊娠期は母親の身体的な負担もあり、家事を行うことは母親に対するサポートとして行われるといえる。したがって、出産後においても、家事は母親に対するサポートとして考えられたことが推測される。

次に、母親と父親の親アイデンティティの構造を検討したところ、加藤ら（2019）の研究とは異なる因子構造が明らかとなった。まず、加藤ら（2019）では、父親と母親とではほぼ同じ因子構造が得られたが、本研究では、母親と父親では異なる因子構造が得られた。加藤ら（2019）の研究では、父親母親ともに、「親としての自信のなさ」「親役割の受容」「自己優先的な親役割」の3因子が得られたが、本研究では、「自己優先的な親役割」にあたる因子が得られなかった。「自己優先的な親役割」は、育児におけるストレスや躓きなど困難な場面で揺らぎやすい親アイデンティティであることが示唆されており（山下・石田・加藤，2018）、育児の中で個のアイデンティティと親としてのアイデンティティが葛藤する状況で生じる親アイデンティティであることが予測される。しかし、妊娠期においては、現実的にその葛藤を経験していないため、因子としてあらわれてこなかった可能性が考えられる。また、「親としての自信のなさ」「親役割の受容」については、構造は異なるものの、肯定的な親アイデンティティと否定的な親アイデンティティという点で、妊娠期にも類似の因子が得られた。したがって、妊娠期から肯定的もしくは否定的な親アイデンティティの獲得が見通されていることが予測される。

本研究では、母親父親ともに、親になることに対する不安や自信のなさ、親になることに対する自信が、親アイデンティティに含まれることが示された。一方で、母親においては、親として役割を遂行することへの自信と、自分の人生において親になることへのポジティブな展望とが、異なる因子として得られたが、父親においては、親になってうまくやれるかについての不安と、自身が親になることその

ものに対して自信がもてないという感覚とが、異なる因子として得られた。妊娠期において、母親は父親よりも、親になることで生じる制約を認知していることが示されており（佐々木、2005）、制約を認識したうえで、現実的な親としての役割を意識すると同時に、自分の人生において親になることをポジティブにとらえたいという希望的観測をもつことが推察される。一方、父親は、妊娠による生理的変化を経験しないため、親役割遂行への不安と同時に、自分が親になることそのものに対して自信がもてない感覚が生じる可能性が考えられる。

次に、妊娠期によって、親アイデンティティに違いがみられるかどうかを検討した。その結果、父親は妊娠期別の親アイデンティティには大きな差異はみられなかった。本研究では、親アイデンティティを、出産後に感じるであろうという見通しとして尋ねており、実際に親役割や親としての行動を経験していないと、想像しにくい質問項目も含まれていたと考えられる。父親は、母親に比べて妊娠期に身体的な変化が生じないことから身体に裏打ちされた変化の実感が少なく、親になる見通しも漠然としたものしか持てなかった可能性がある。そのため、時期別の親アイデンティティに大きな差が生じなかったのだろう。また母親も、妊娠・出産にまつわる具体的な不安や心配は感じて、親になることに関しては具体的な見通しが持ちにくく、期間によって違いがみられなかったのかもしれない。ただし、母親の場合、他の期間よりも正産期において、「親役割遂行への不安」が高いことが示された。小嶋（2014）は、妊娠後期の女性は分娩経過や出産に大きな不安を感じることを示している。本研究では周産期において出産そのものだけでなく、出産後の親として役割を遂行できるか否かについても不安が高まることが明らかとなった。したがって、妊娠後期後半、特に出産後を具体的に見通せる時期には、分娩出産への不安除去のみならず、親としての見通しの獲得を促すような支援が必要だといえるだろう。

次に、妊娠期の夫婦の関係性と、出産後予測される父親の育児行動評価が、親アイデンティティに及ぼす影響について検討した。その結果、母親の「親役割遂行への不安」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると夫が思う程度が低い場合に高まることが示された。また、「親役割遂行への自信」、「親になることへの展望」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると自分自身が思う程度が高い場合に高まることが示されたが、父親の母親に対する支援を高く予測する場合に「親役割遂行への自信」が高くなり、子どもに対する育児行動を高く予測する場合に「親になることへの展望」が高くなった。他方、父親に関しては、「親になることへの自信のなさ」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると妻が思う程度が低い場合に高まることが示された。さらに、「親になることに対する自信」は、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると自分自身が思う程度が高く、自分の母親に対する支援と子どもに対する育児行動を高く評価していると高くなるが、妻が父親の子どもに対する育児行動を高く予測していると低くなることが明らかとなった。これらのことから、妊娠期に推測される親アイデンティティに影響するのは、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まらるだろうと考える程度であり、出産後の夫婦関係がより強固なものになるであろうという推測が、親としてのアイデンティティに関するポジティブな予測にもつながっていることが示唆される。妊娠期に、子どもの誕生を機に夫婦の関係性がより強固になるというポジティブな見通しを持つことは、肯定的な親アイデンティティの見通しをたやすくし、妊娠期の夫婦関係や心理的健康にポジティブな影響を与えるだけでなく、出産後の肯定的な親アイデンティティの獲得を円滑にする可能性がある。ただ、本研究における回答は、両者とも予測であり、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると考えていても、実際にそれが親としてのアイデンティティの獲得につながるかどうかは未知である。小野寺（2005）においては、夫婦間の親密な感情は親になって2年間の間に下がるが、3年を経過するとその下がったレベルのまま安定し推移することが示されている。

る。親密性が低下する要因として、夫は「妻のイライラ度合いが強い」「労働時間が長い」、妻は「夫の育児参加が少ない」「子どもが育てにくい」ことを指摘している。このような結果からも、出産後に生じる育児における困難や葛藤は妊娠期よりも増えてしまうケースもあり、夫婦の関係に距離や亀裂が生じてしまうことも推測される。したがって、妊娠期に予測していた夫婦関係や子育てのあり方と出産後の実際とのギャップが親アイデンティティに及ぼす影響について検討し、そのギャップを埋める支援を考えることもまた必要である。

また、父親の「親になることに対する自信」に関して、自身が、子どもも母親も支える育児行動ができると予測するほど高まるが、母親が、子どもに対する育児行動ができると予測するほど低下していた。このことから、父親自身が育児行動を遂行できると予測することは自信を高めるが、母親から子どもに対する育児行動を期待されることはプレッシャーとなり自信を低下させる可能性が考えられる。父親の親としてのアイデンティティについて検討した研究(山下・石田・加藤, 2018)では、子育てに関して母親から理解されていないことへのストレスが、父親の親としての自信を低下させることが示されており、時期に関わらず、父親の親としての自信は母親の期待や評価に大きく影響を受ける可能性がある。妊娠期において、父親は母親にくらべて親になる実感が低く(小野寺ら, 1998)、子どもの存在を直接的に感じることも少ないだろう。このことから、妊娠期に母親がイメージする育児行動と、父親がイメージする育児行動にずれが生じることがあると考えられる。これまで、宮木(2014)では、父親は「育児参加している」と感じているにも関わらず、「父の育児参加に満足していない」母親が4割弱であったことが示されている。また、父親の育児は母親の育児とくらべると、一時的、補助的な、いわば気が向いたときの育児となりがちであり、そのような父親の育児のあり方自体が母親にとってのストレスを増大させる可能性が指摘されている(西尾, 2013)。これらの先行研究の結果から、育児をするなかで、母親の期待と父親の行動とがずれ違ふことがあることがわかり、そのずれ違ふをどのように調整し、解消するののかについて、プロセスを検討する必要があると考えられる。また、妊娠期においては、胎児の存在を実感することが、父親の人格的発達に関連していることが明らかになっており(佐々木, 2005)、妊娠期から、夫婦ともに子どもの存在への意識を共有しながら過ごせるような援助が必要であると考えられる。

最後に、本研究の問題点と今後の展望について述べる。本研究では、子育て初期における親アイデンティティ(加藤ら, 2019)と、妊娠期の親アイデンティティは異なることが推測されたが、実際にどのようなプロセスで妊娠期から親アイデンティティが発達しはじめるのかについては明らかではない。これらの親アイデンティティが出産後どのように移行していくのか、どのように親アイデンティティの基盤として機能するのかについては、今後も検討が必要である。また、本研究では、子どもが生まれることで夫婦の絆が強まると考える程度が、妊娠期の親アイデンティティに影響していることが示されたが、この予測が、子育て期の親アイデンティティの発達にどのように影響するのかは明らかではない。これまで、妊娠期から育児期を通して、夫婦関係や親の成長にどのような変化があるのかについて検討した先行研究は多い(例えば、小野寺, 2005, 田村ら, 2002, 中澤ら, 2003)が、出産前の予測が出産後の夫婦関係や親アイデンティティとどのように関連するのかについてはあまり検討されていない。したがって、今後は、妊娠期から子育て初期にかけての縦断的な研究により、妊娠期の親アイデンティティや産後の夫婦関係への見通しが、子育て期の心理的健康と関連するのかについて検討することで、妊娠期からの継続的な支援への示唆を得ることが課題となる。また、本研究では、妊娠期の初期と中期を1群としたが、安定期と呼ばれ胎動を感じるようになる中期と妊娠初期では意識構造が異なるという指摘も

ある（榮，2004）。そのため，今後はデータ数を増やして妊娠期をより詳細に分け分析を行う必要があるといえる。

付記

- 1) 本研究は十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施されたものである。
- 2) 本研究は，日本心理学会第84回（2020年）において発表された内容に加筆修正を行ったものである。

引用文献

- 浅野良輔（2009）. 親密な対人関係に関する楽観性・効力感尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 対人社会心理学研究, 9, 121-130.
- 浅野良輔（2011）. 恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響：二者の間主観的な効力期待の導入 社会心理学研究, 27, 41-46.
- Belsky, J., & Kelly, J. (1994). The transition to parenthood. New York: Delacorte Press. (安次嶺佳子（訳）(1995)『子供をもつと夫婦に何が起るか』草思社)
- 堀口美智子（2006）. 乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度 家族社会学研究, 17, 68-78.
- 堀野道・吉田富二雄（2001）. 心理測定尺度集Ⅱ 人と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉 夫婦関係満足度尺度（諸井, 1996）, 150-152.
- 国立社会保障・人口問題研究所（2015）. 第15回出生動向基本調査 〈http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp〉（2020年12月25日）
- 厚生労働省（2019）. 令和元年国民生活基礎調査 〈<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html>〉（2020年9月15日）
- 加藤陽子・山下倫実・石田有理・布施晴美（2019）. 夫婦における父親の育児行動評価と親アイデンティティ及び関係効力性との関連 十文字学園女子大学紀要, 50, 19-31.
- 木越郁恵・泊祐子（2006）. 周産期における夫の父親役割獲得プロセス 家族看護学研究, 12, 32-38.
- 小嶋奈都子（2014）. 妊婦とパートナーの妊娠への適応と関連する個人的背景の比較 日本母子看護学会誌, 7, 11-21
- 小泉智恵・中山美由紀・福丸由佳・無藤隆（2004）. 妊娠期における夫婦の状況—親となる意識の男女比較—お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要, 1, 13-18.
- 宮木由貴子（2014）. 父親の子育てに関する一考察～30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識～ Life design report, 210, 28-35.
- 中澤智恵・倉持清美・田村毅・岸田泰子・及川裕子・森田千恵・荒牧美佐子（2003）. 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響（4）：第一子出生後の夫婦関係の変化と子育て, 東京学芸大学紀要, 55, 111-122.
- 西尾新（2013）. 母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響—育児頻度の評価及び父母間の評価の齟齬から—甲南女子大学研究紀要（人間科学編）, 49, 59-74.
- 岡本祐子（1996）. 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 小野寺敦子（2005）. 親になることにともなう夫婦関係の変化, 発達心理学研究, 16, 15-25.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓（1998）. 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究, 9, 121-130.

- 榮玲子 (2004). 妊娠期における母親意識の構造 香川県立保健医療大学紀要, 1, 49-56.
- 佐々木くみ子 (2005). 親となることによる人格的発達に関する研究—第1子妊娠期の父母について— 母子衛生, 46, 62-68.
- 佐々木くみ子 (2006). 親の人格的発達に影響を及ぼす諸要因：妊娠期から乳児期にかけて 母子衛生, 46, 580-587.
- 佐藤小織 (2012). 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究—育児初期の核家族に焦点を当てて— 日本助産学会誌, 26, 222-231.
- 田村毅・倉持清美・中澤智恵・岸田泰子・木村恭子・及川裕子・荒牧美佐子・持田恭子・森田千恵 (2002). 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (1)：出産前後の面接調査のまとめ, 東京学芸大学紀要, 54, 41-56.
- 山口雅司 (2010). 母親になるということ—母親アイデンティティをめぐる考察 (相山女学園大学研究叢書), あいり出版.
- 山下倫実・石田有理・加藤陽子 (2018). 父親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討 十文字学園女子大学紀要 49, 13-25.